

「柴講」という「縁

お講とは、今から六百年ほど前の蓮如上人の時代、毎月決まった日に「寄り合い・談合」の場が持たれ、それぞれの信心を確かめ合ったのが「お講」の始まりです。「お講」に集まった人々は、宗祖親鸞聖人への報恩謝徳のお心として、収穫した作物や物資を仏前にお供えし、そして、それらは真宗本廟に納められました。「柴講」は、二百年以上続いていて、かつて真宗本廟報恩講のお齋作りにかまどを使用したころは燃料となる柴

や薪を納めていました。かまどを使わなくなった現在でも燃料懇志をお供えしています。今月21日から真宗本廟では報恩講が動まっています。今回、当紙面において『同朋新聞』(2003年11月号)『現在いまを生なきる』に掲載された記事を紹介し、先人先達が伝えてきてくださった「本山柴講」の意義を訪ねたいと思います。

大阪府の北部にある茨木市の山間部、旧三島山手組(現在大阪教区大11組の一部)には、本山の報恩講に薪や柴を持ってお参りする「柴講」が伝わっている。市の南部を流れる淀川は、その昔、川を境に芥子の花と菜の花で白と黄色に染まり、向こう岸での河内の油講に対し、「山でたく

さん柴がとれるから」とこの地で柴講がおこったそうである。

報恩講のお齋を作るのに使ってもらおうと、今から190年ほど前、組内の9カ寺が中心となって組織され、また近隣の車作板谷の教行寺門徒も参加した。住職が毎年交代で当番をして呼びかけ、「ご本山に納める柴だから、地面においてはもつたいない」と各寺で布や筵を敷き、その

先人から後生の一大事のために」と相続これに尽きる

上に計610束の薪や柴を集めた。集めた柴は牛の背に乗せ、旗やのぼりを掲げて農道を下り、淀川の前島まで運んだのち、船で本山に納められた。当時は柴講々員35名が毎年交代で選ばれ、本山近くの宿に泊まって報恩講の晨朝じんじょうにお参りし、帰敬式ききょうしきを受けた。その後のお齋にはかみしも袴を借りてきて着用し席に連なり、お齋を重箱に詰めてお土産に持って帰り、番に

当たらなかった近所の人に分けたそうである。(中略)

現在、柴講は永久寺、教圓寺、長徳寺、長福寺、教誓寺、円福寺の6カ寺と板谷の教行寺門徒により行われている。また、時代の変遷とともに運搬も牛・船から、鉄道、トラックへと形態が変わり、今では金納になっている。昭和15年から28年まで薪の統制がしかれ、一時やむなく途絶えたが、現在まで毎年、柴講が引き継がれてきたのは「わし、お七夜しちや(本山の報恩講)にお参りするねん。ほんでおかみそり受けんねん」と当番に当たるのを楽しみにしているご門徒の方々がいるからに違いない。円福寺住職(当時)は「後生の一大事のために」と相続してくれはったんやろな。これに尽きるんや」と、先人から柴講という縁をいただき、報恩講にお参りできる喜びをかみしめておられた。

※本文は大阪教区・松谷泰明通信員(当時)のレポートによる文章です。

